

建築の遺し方

早稲田大学・小松幸夫

(建築技術 2016 年 2 月号 建築の喜怒哀楽 掲載)

奇特な同級生がいて、数年前に小学校の同窓会を卒業から半世紀ぶりに開くことになった。母校の近くで開かれた本番の会合には残念ながら参加できなかったが、東京支部と称して旧友たちと集まる機会がもてるようになったのはうれしいことである。普段は建築関係者との話が多いが、小学校の同級ともなると仕事の分野も経験もさまざまに世界が数段広がる感じがする。

我々が小学校に入学したのは昭和 30 年代の始めであった。当時はまだ終戦間もないころで、周囲にある建物も今の目からすればかなり貧相であったが、我々の母校の校舎は 3 階建ての鉄筋コンクリート造であった。入学の時点では空襲を避けるための黒い迷彩が塗られたままだったのを覚えている。我々はその RC の校舎を当たり前のよう感じていたが、余所から見れば「へえー、テッキンなの」とびっくりされるような状況であったろう。平成になってすぐに建て替えられたようなので、卒業アルバムからコピーした写真で外観を紹介する。

写真 ありし日のわが校舎



内部の廊下は縁甲板張りで、油が引かれて床板はコーヒー色をしていた。この油は年に 1 回程度だったと思うが、長期の休み明けに引き直されていたのを覚えている。油引き直後の床はつるつる滑って転びそうだったが、転ぶと洋服が油だらけになるので新学期最初の 2、3

日はちょっとした恐怖であった。教室に照明はなく、雲の垂れ込めた雨の日などは黒板や教科書が見えにくかった。また冷房はもちろんのこと暖房設備もなかったが、冬に寒いのは当たり前で特に不満を言う者もなかった。

母校のホームページによると、この校舎は昭和4年に第1期工事が、最終的には昭和11年に完成したとのことである。写真で見られるように、戦後に普及したいわゆる標準設計の校舎とはかなり雰囲気が違っている。特にパラペットの端部が円弧状になっていたり（屋上にはパラペットの代りに金網のフェンスがある）、バルコニーには水平を強調した手すりや端部が曲線で処理されたスラブが付いていたりなど、モダニズムの雰囲気をそれとなく匂わせているデザインである。写真では木の陰になってしまっているが、校舎が直角に接続している部分は斜めの壁になっており、入り口上部の壁には太い三本のマリオンに挟まれた縦長の窓と、その両側に円窓が各階に配置されていた。この円窓は記憶に強く残っている。設計者の意図としてはこの部分が正面の見せ場であったのだろうと想像される。このあたりの意匠には、どこか分離派の影響があるようにも思われるがいかがであろうか。もっとも我々のいた時代には、この正面部分の入り口近くに給食室が設けられており、入り口は食材などの搬入口のようになっていたような記憶がある。後になって筆者は、この建物の設計者が竹腰健造であるという話を耳にしたことがあるが、その真偽のほどは定かではない。年譜によると竹腰は昭和8年に住友から独立して長谷部竹腰建築事務所を設立しているが、独立直前に引き受けた仕事だったのであろうか。卒業生の一人としては、母校の校舎が建築界の大先輩の設計によるものであるならば、内心誇らしい気持ちになれるのだが。

ところで300人以上もいた同級生の中にすぐ近所に住んでいた幼なじみがいる。その友人は美術系大学を卒業して印刷会社に勤務しているが、現在の主な仕事は文化財の仮想現実化による保存、すなわちコンピューターや計測装置を駆使して古社寺や国宝級の絵巻物、あるいはカンボジアの仏教遺跡等の文化財をデジタル化していくことである。その成果は上野の博物館などで一般に公開されているので、あるいはご覧になったこともおありかと思う。同窓会の席で友人からそのような話を聞かされたあと、一度実際に見に来いと言ってくれたので彼の会社まで出かけて行った。数十人が入れる専用のシアターに案内されて眼前に広がった大きなスクリーンの映像をみると、まるでそこに本物が本物以上の姿で存在するように見えたのには感動した。コンピューターの中では当然ながら3Dモデルで作成されているので、こちらの操作によって視点を自由自在に変えて見られるが、それは実物を見学するには全く不可能なことである。絵巻物などは小さな部分であっても、精彩に大きくまた明るく拡大できるので、実物を見る以上の魅力を味わうことができる。建築の業界でもBIM等を始め、コンピューターによる3次元モデル化映像はごく普通に目にするようになったが、数年前の4K画像は高精細というだけでも感動的であった。友人は、文化財を高精細の3Dモデルで保存することは、いつまでも劣化せずだれでも自由に見られる環境を作れるのでそこに大きな意義があると語っていたが、その言葉に十分納得がいった。その帰り道に居酒屋へ寄って話していると、友人が「古文化財だけでなく近代遺産のようなものにも対

象を広げたいが、何か建築でアイデアはないか」と問いかけてきたので、即座に思いついたのが旧帝国ホテルの建物である。周知のように旧帝国ホテルは F.L.ライトの設計で、日比谷近くの現在の帝国ホテルと同じ場所に建てられていたが、改築のために取り壊されてごく一部だけが愛知県の明治村に保存されている。筆者は昭和 43 年に上京したが、その時には旧帝国ホテルは既に解体されており、残念ながらタッチの差で実際の空間を体験することはできなかった。同じ頃に三菱一号館も解体されたが、こちらも実物を体験する機会はなかったものの、最近ほぼ元の通りに再建されたのでどのような空間であったかは体験することができる。

近代遺産建築の再現候補として帝国ホテルを想起したのは、実測図面があることを知っていたためである。筆者の勤務する早稲田大学建築学科の明石教授が解体前に精力的に実測調査を行い、その成果が出版されていることはご存じの方も多いであろう。建築史が専門の同僚に尋ねたところ、明石研究室で作成した原図が大学図書館にあるということを知り、そのことを友人に連絡した。友人はさっそく図書館に連絡して閲覧させてもらったが、図面の傷みが激しいので門外不出にしているというようなことであった。最近はスキャニングの技術が進歩しており、例えば国宝級の絵巻物などは特殊なスキャナーで撮影して全く歪みのない映像を得ることができるとのことである。こうした技術を使えば図面のデジタル化も写真レンズの歪みを排除して寸分の狂いなく行えるし、デジタル映像化のため資料として十分に使えるはずである。友人はあちこちに声をかけて旧帝国ホテルのデジタル化プロジェクトを進めようとしているが、当面の問題は資金である。億単位とまではいかないが少なくとも数千万程度の費用は必要とのことで、まずはスポンサー探しである。また研究的な要素もあるので、どこかに学術的な推進母体を設けることも必要になるであろう。

このような状況なのでまだプロジェクトとしては具体化していないが、もしこれがうまくいけば建物の遺し方としての新しい形になると考えている。我が母校の旧校舎の空間は卒業生の記憶の中にしか残っておらず、それらもいずれは消えてしまうが、3次元でデジタル化して高精度の映像化ができれば、あたかも現実存在するかような感覚での空間体験が可能になる。文化財として実物を維持していくことの意義は大きいものの、価値のあるすべての建物を実体のまま維持・保存していくことはなかなか容易ではない。建物の新しい遺し方として、ぜひともこのプロジェクトは成功させたいと願っている。（どなたか有力なスポンサーを紹介していただけないでしょうか。）